

2026年 1月14日 (水)

事前申し込み不要

〈時間〉 18:00～19:00

〈場所〉 第二臨床講義室

〈対象者〉 学生、大学院生、研修医、教職員、病院職員 等



脂肪酸結合タンパク質の発見がもたらす レビー小体病の革新的治療戦略

講師 医学部附属生体情報伝達研究所,
生体機能研究部門, 特任准教授

川畑 伊知郎 先生

高齢化社会の進展に伴い、パーキンソン病 (PD) やレビー小体型認知症 (DLB) などの神経変性疾患の増加が深刻な社会問題となっている。これらの疾患に対する対症療法薬は日々進歩しているものの、多様な周辺症状による患者のQOLや治療満足度は依然として低い。また、孤発性PDやDLBの根本的な発症機序は長らく不明であり、加齢による神経変性リスクを予測し根本治療する手段は存在しなかった。

私たちは、脂肪酸結合タンパク質 (FABP) が、 α シヌクレインの蓄積を特徴とするPDやDLBなどの α シヌクレイノパチーの病態発現に深く関与することを世界で初めて明らかにした。FABP欠損マウスではPDやDLBが発症しないこと、PD・DLB患者ではFABPが脳内に蓄積し血中濃度が上昇することを発見した (IJMS 2019, 2023; Brain 2023; Redox Biol 2023他)。

本セミナーでは、生体機能制御におけるFABPの役割と α シヌクレイン病理への関与を紹介し、創薬標的としてのFABPの有効性、FABPリガンドのモデルマウスにおける治療効果、さらに前臨床・臨床開発の現状について報告する。日頃、臨床現場に立たれる先生方のご指導と共同研究を通じ、この革新的治療法の実用化を目指したい。

本セミナーは大学院授業要項に基づく“**共通必修科目規定(8)**”に該当します。大学院生は履修票記入の上持参してください。本セミナーに関する問合せ先: 生体物質研究部門 本間 美和子(内2811)・生体機能研究部門 小林 和人(内2841)